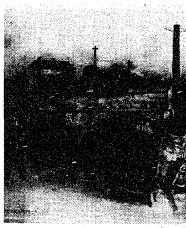
桐生に"文化の殿堂"誕生

大川美術館

近代日本洋画など1300点

理事長兼館長の大川栄二氏 40年間かけ収集

近代日本洋画の代表的な画家を中心に、ピカソ、ルオーら海外の逸品千三百点を集めるユニークな美術館が、桐生市小曽根町にオープン、県内への美術関係者の注目を集めている。同市出身で、ダイエー顧問などを務める実業家の大川栄二氏が、私財を投じて建設した財団法人・大川美術館で、収蔵品はすべて大川氏が四十年間に収集したコレクション。その作品群は「全国トップレベルの内容」と高く評価、建物も一周忌の景観と見事に調和し、地方文化を担う美術館らしい本物の美術館」と絶賛されており、「優れた絵を通して精神性を高め、桐生ならではの文化を築きたい」と大川氏は話している。



松本竣介「運河」

野田英夫「子供たち」

同館の運営兼館長に就任した大川氏は「美術館をオープンしてよかった。私の家にがはらくら見える。本物は、時間の経過とともに味わいが増してくる。本物はやはり本物だということだね」と感想を述べた。

大川氏が本格的美術収集に乗り出したのは、三十六歳で世を去った妻介護のためにヨーロッパ旅行をしたのがきっかけ。「妻の絵（八号）を二十四万円で買ったのを手始めに、つられ、練馬なくなった。最近、桐生の街がその美しく見えるようになった」とも加えた。

大川氏は大学卒業後間もなく結核で療養、病室に運び込まれた美術書を読んでいるうちに絵の世界にのめりこんでいったという。

サラリーマンが趣味で絵を買うことは珍しくないが、三百点以上の作品を一人で収集するケースは極めて異例。

大川氏は「絵は人間的で美しくあるべきだ」と語っており、同館にとって最も自慢のコレクションとなっている。

一人の作品個展はいまだめての中核をなす松本竣介と野田英夫の二人。

「竣介は人間的で美しくあるべきだ」と語っており、同館にとって最も自慢のコレクションとなっている。

野田英夫「子供たち」